

ロペス＝オブラドールとは何者なのか ーメキシコ 2018 年総選挙の展望ー

受田 宏之

はじめに：21世紀のメキシコ政治

2018 年 7 月 1 日に行われるメキシコの総選挙（大統領、500 名の国会下院議員、128 名の国会上院議員を選出）が注目されている。ラテンアメリカにおける「改革の優等生」であり、自動車産業をはじめ日系企業がこぞって進出するメキシコは、政治的に安定しており、民主主義を深化させつつある国とみなされてきた。ところが、今のメキシコを覆うのは、既成の政治への不信、閉塞感である。そうした中、保守派からは「左派のポピュリスト」として恐れられてきたものの、新党を率いて三度目の大統領選に臨むロペス＝オブラドール（以下オブラドール）への期待が高まっている。

2000 年から二期に及ぶ中道右派の PAN（国民行動党）政権を経て、2012 年に PRI（制度的革命党）が政権に返り咲いた。周知のように、PAN 敗退の最大の要因は、その第二期政権を担ったカルデロン大統領が麻薬カルテルに対し強硬策を取り、失敗に終わったことにある。前フォクス政権よりも実行力があることを示そうと大統領の出身地ミチョアカン州で始められたカルテル鎮圧策は、これまでに 10 万人を超えるとされる犠牲者を出すなど、その人的、社会的損失は夥しいものだった。

PRI の側も、「革命の後継者」として 71 年間に及んだ一党支配を手放して以降、失地回復に努めてきた。PRI の支持基盤の固いメキシコ州の前知事であったベニャ・ニエトは、空港建設反対派への弾圧（San Salvador Atenco 事件）や学生運動（Yo Soy 132）に糾弾を受けたことから左派や若い世代には評判の芳しくない一方で、若くハンサムであり、「新生 PRI」を掲げることで、選挙に勝利した。勝利後は、中道左派の PRD（民主革命党）は後に離脱したものの、他政党と政策協定（Pacto por México）を結び、改革を推進しようとした。（教員組合の権限を弱めることを目指す）教育改革、（TELMEX グループの独占緩和を目指す）

通信部門改革、（石油公社 PEMEX への外資導入を認める）エネルギー部門改革等を実現し、さらにより包括的なカルテル対策を説くことにより、ベニャ・ニエト政権はその初期には、特に国外において、高い評価を得ていた。

ところが、選挙関連の情報がメディアを賑わすようになった 2017 年の夏時点で、PRI、PAN、PRD の主要 3 政党のいずれも優位な立場にない。それぞれが課題を抱えているほか、トランプ政権の誕生が混乱に追い打ちをかけた。その中で、オブラドールと彼の率いる新政党が着実に支持を伸ばしている。

最近の選挙結果と世論調査を読み解く

最近実施された選挙の結果をみてみよう。2015 年 6 月の国会下院選挙では、PRI が 203 議席（2012 年時と比べ－10 議席）、PAN が 109 議席（同－5 議席）、PRD が 61 議席（－42 議席）なのに対し、MORENA（国民刷新運動）が 35 議席を獲得している¹。PRD を離れたオブラドールとその支持者が設立した MORENA は、2014 年 7 月に政党として登録されたばかりであった。MORENA の躍進は、左派勢力が根強い首都の連邦区（2016 年よりメキシコ市に改称）において顕著であった。たとえば、それまで 16 ある行政区のうち 14 区の長は PRD に属していたが、2016 年の地方選挙の結果、5 つの行政区で MORENA の区長が誕生した一方、PRD の区長は 6 人に減っている。この他にも選挙でみられた興味深い出来事として、ヌエボレオン州知事選（Jaime Rodríguez 氏）やグアダハラハラの州議会選（Pedro Kumamoto 氏）において無所属だが主張の明確な候補が勝利しメディアの脚光を浴びたこと、「麻薬戦争」の動向が選挙結果に影響を与えた地域が少なからずあることなどがある。

2016 年も様々な選挙があったが、州知事選についてみると、改選された 12 州のうち、PRI は 2 州を他党か

ら奪った一方、6州を失っている。逆に PAN は、2州(うち1州は PRD との連合)を失ったが6州を PRI から奪っている。PRD は3州を新たに獲得しているが、これはいずれも PAN との選挙連合の結果であり、左派勢力として衰退傾向にあることに変わりはない。2017年6月の選挙では、メキシコ州とコアウイラ州の知事選で PRI が僅差で勝利したものの、ナジャリ州の知事選およびベラクルス州の郡・市長選では PAN と PRD の連合が圧勝している(後者では53.6%の自治体で勝利)。MORENA も、メキシコ州知事選でその女性候補者が次点(33.7%に次ぐ30.8%)につけるなど、浸透ぶりを示した。

最後に、大統領選に関する各社の世論調査の動向を取り上げてみたい。PRI の下降、PRD の長期低迷、それらにともない最有力であった PAN が上昇基調の MORENA に抜かれるという趨勢が、概ねみてとれる。MORENA 以外の政党が候補をまだ決めていないこと、不明の回答が目立つこと、さらに MORENA の人気は大統領選以外では落ちることを差し引く必要はあるとはいえ、現時点で次期大統領に最も近いのはオブラドールである。こうした状況を受けて、社会運動出身者を含む PRD の一部政治家が MORENA に合流しつつある一方で、PRD の穏健派の間では PAN との連携に活路を見出そうとする動きがある。

以上、主要政党に陰りがみえる一方、オブラドールと一体化した MORENA が伸びている。背景に何があるのだろうか。第一に、特に PAN と PRD、とりわけ PRD に当てはまるが、主要政党は内部に派閥や対立軸を抱えており、党員の広い支持を得て非党員にも訴えることのできる有力な候補が現れていない。第二に、与党の PRI が大統領と複数の州知事も含め数々の汚職スキャンダルに見舞われ、かつ2015年より麻薬関連の犠牲者が再び増えつつあるなど治安に顕著な改善がみられないことは、政治の浄化を唱えてきたオブラドールを利した。第三に、メキシコの経済指標に特に憂慮すべき兆候は見当たらないとはいえ、生産性が低く不安定な就業先に就く国民が過半を占めていることは、新自由主義を批判するオブラドールに共鳴し得る広範な層の存在を意味する。最後に、「右派のポピュリスト」トランプ大統領による一連の理不尽な要求は、毅然と反論しない現大統領や、アメリカとの経済統合を推進したエリートと比べ、NAFTA を締結したサリーナス大統領(任期1988～94年)の敷いた路線をずっと非難してきたオブラドールの説得力を高めることになっ

たのである。続いて、オブラドール自身をどう評価すべきか考察してみたい。

ロペス＝オブラドールはポピュリストなのか

オブラドールは、1953年にタバスコ州で生まれた。若くして同州の PRI 幹部となったが、PRI に見切りをつけて PRD の結党(1989年)に加わる。左派の候補として二度タバスコ州の知事選に挑んだが、勝利を収めることはできなかった。1996年から99年にかけて PRD の党首を務め、2000年には連邦区知事に選出された。知事時代は、高齢者への非拠出型年金の導入を含む低所得層向けのプログラムや歴史地区の再開発など派手なプロジェクトにより、全国的に知名度を高めた。だが、2006年、12年と二度の大統領選ではいずれも次点にとどまっている。二度目の敗退後は PRD の穏健派との関係が悪化、MORENA を結成し、国の再生を実現するというラディカルな言説と全国各地を行脚するタフさにより、存在感を示してきた。

オブラドールを理解しようとする際、分配重視、ナショナリズム、腐敗の嫌悪といった政策上のスタンスに加え、飽くなき権力欲、さらにその裏返しともいえる意見を異にする者への不寛容さは、見逃せない資質である。自分たちの選挙活動を妨害すると思われる者および投票で自分たちを上回った者に対しては、支持者をデモ等に動員しつつ、糾弾を繰り返してきた。PRD の穏健派も批判の対象になるし、PRI の候補を支持した兄弟を裏切り者扱いすることもためらわない²。

執筆者の現地での経験を述べると、高学歴のオブラドール支持者は、他の政治家には期待できないだろう彼の清廉さや揺るがぬ主義主張を高く評価する傾向にある。だが、階層が下がるにつれ、実利の重要性が増していく。オブラドールの数ある大衆動員の中で最も有名であろうものに、2006年の大統領選で惜敗した際、票の改竄があったとして、連邦区の見抜き通りであるレフォルマを3ヵ月間封鎖したことがある。占拠者の中には、執筆者が調査していた先住民移住者が一部含まれていた。スラムに住み行商など不安定な仕事に就く彼らは、他の大半の占拠者同様、オブラドールの生き様に惹かれたからではなく、住宅や生業に関する地方(連邦区)政府との交渉において有利な条件を引き出すため、半ば義務として参加していたのである。

選挙を意識して2017年に出版されたオブラドールの著書からも、彼の思考の本質を読み取ることができる[López Obrador 2017]。前半部で彼は、PRI や PAN の

政治家と官僚、企業家（政商）の間での脱法行為と免責、浪費、癒着の例をこれでもかと列挙する。腐ったエリート達による諸々の無駄を省けば、政府歳出は実に3,620億ペソの節約になるという。後半では、国家の役割を重視し、分配の改善と国内需要の喚起を志向する政策方針が語られる。末尾では倫理と宗教への言及がなされ、強欲の戒めや隣人愛が説かれる。経済成長（年率4%を達成）と物価安定も政策目標に含めるとするが、技術革新や教育の質の向上といったメキシコの直面する難題への妙案を持っているわけではない。小農、大学に行きたくても行けない若者、スラム住民、一般公務員等への手厚い保護策が、依存を含め彼らの行動に及ぼすだろう悪影響への配慮も不十分である。「敵」にはとことん厳しいが、「身内」には無条件といえるほど甘いのが、オブラドールという人物なのである。

オブラドールはポピュリストなのだろうか。ポピュリズムの代表的研究者と目されるミュラー（2017）は、少なからぬ先進国においても民主主義体制を脅かしつつある現代ポピュリズムについて、以下のように論じている。

（1）ポピュリズムの要件をなすのは、反エリート主義という一般に挙げられる特徴に加え、「自分たちだけが道徳的に正しく、人民を代表している」という反多元主義である。このため、ポピュリストは「真の人民」との政治的な仲介を排除する傾向にあるし、選挙での敗退を正当なものとして認めることができない。

（2）ポピュリストが政権を奪取した場合、国家の占拠、腐敗をともなう大衆へのクライエンテリズム（恩顧主義）の実践、および批判勢力の抑圧に取り組むことになる。

（3）ポピュリズムに対抗するには、排他性や独善性を共有するのではなく、支持者の不満や怒りを理解し、彼らを包摂していくことが求められる。

（1）の要件について、オブラドールがポピュリストでないと見做すのは難しい。ミュラーも、落選を認めないポピュリストの例として彼に言及している〔ミュラー 2017：p.41〕。他の定義に従っても、彼はポピュリストのリストに含まれるだろう。だが、（2）政権に就いたときの特徴付けについては、メキシコ社会はベネズエラのような事態に陥ることを許容しないだろうし、オブラドールの側からみても、知事時代の実績や来年65歳になり心臓疾患を抱えていることを考慮するならば、独裁化し社会の分断をもたらす可能性は低い。選

挙対策の観点からは、勝ったときにオブラドールが何をすると予想されるかは重要である。保守派はこれまで同様、彼をチャベスのごとく扱うだろうし、逆にオブラドール派は、社会に混迷をもたらすことはない選挙民を説得しようとする強い誘因を持つ。最後に、（3）の代案に関していうと、PRIやPANがオブラドールを負かすためには、ネガティブ・キャンペーンを超えて、エリートやフォーマルな制度を信頼しない多数の国民の包摂を試みる必要があるが、ハードルの高い課題である。

現時点で来夏の選挙予想はできない。だが、左派が勝てないといわれてきたメキシコにおいて、左派、それもポピュリスト的な左派の大統領が誕生するかもしれない。

（うけた ひろゆき 東京大学大学院総合文化研究科准教授）

引用文献

López Obrador, Andrés Manuel, 2018 *La Salida*. México: PLANETA 2017.

ミュラー、ヤン＝ヴェルナー『ポピュリズムとは何か』（板橋拓己訳）岩波書店、2017

1 選挙結果はINE (Instituto Nacional Electoral) のウェブサイトによる。500議席の残りは、PVEM（緑の党）が47議席、Movimiento Ciudadanoが25議席、Nueva Alianzaが11議席、Encuentro Socialが8議席、独立候補1議席となっている。

2 Martínez Ahrens, Jan, "López Obrador rompe con su hermano por apoyar al candidato del PRI en Veracruz," *El País*, 31 May, 2016.